

末黒野

すぐろの

2月号

(通巻906号)



行く秋

杣道の薄日を集め野紺菊
竜胆の紺を散らして芝の庭
浜菊や岩棚を発つ鷗どち
冷まじや日に三便の時刻表
日に残る銀杏黄葉の濃かりけり
たもとほる湧水の里一位の実
捜し回る予備の眼鏡や文化の日
木洩れ日の照りを揺らして烏瓜
能舞台へ下る坂道鴟高音
近道と言ふに惹かれて露万朶
行く秋や色沈みゆく山の肌
冬どなり明けの烏の沈む声

森清堯

水引草

満月の脇侍めきたり星と雲
有明や豆腐屋にはや灯の点り
ちろちろと光る泥濘水引草
白秋の駅より拝す観世音
観音の白衣の肩や薄紅葉
臭木の実風の磨ける瑠璃の色
蒼天へ百果散りばめ禅寺丸
毬栗のこぼるる辻や風化仏
水音に傾るる茨実の赤く
裏返す歩の駒音や秋気澄み
歌女鳴くや束なす反故を捨つる夜半
溪流の石に彩置き散紅葉

岡野里子

晩稲田

黒滝志麻子

(顧問)

晩稲田や雑木山より鳥の群れ
 紅葉且つ散る山裾や幼雅園
 石を分け水の流れや秋の声
 散紅葉伏流小さき音立てて
 松原の小径を行くや冬日和
 北窓を閉ぢたる後の静寂かな
 自動ドア枯葉一枚迷ひ込み
 小流れに犇めき尖る冬芽かな

甲矢集

配列は音順（月毎の循環）



波郷忌

田中臥石

鰯船無くなつてをり九十九浜
 食細くなり立冬の五臓鳴る
 入院のために買ひ足す冬衣
 月蝕の海木枯の鳴り響く
 ゆつくりと冬日射し来る海の上
 木枯に選挙ポスター吹き曝す
 紅葉散る祠の屋根や石重ね
 明日入院霜月粥としたりけり
 波郷忌を迎へてどんと海の音
 波郷忌の八手の花を咲かせけり

湖面

森清信子

土色のばつたの子はや尺を跳ね
 夕映えの湖面の張りや鵲高音
 無造作に抜かるる案山子コンバイン
 稲刈られ一気に谷戸の痩せにけり
 蔓引けばひとつ現れ烏瓜
 白雲の湧く稜線や渡り鳥
 はるかなる餅の触れて照紅葉
 蟪蛄の振り上ぐる斧影の濃し
 朝露の光をこぼし菜を摘めり
 蒼穹へ吸はれてゆきぬ雁の棹

栗ごはん

石黒興平

灯台のすでに点れり秋の暮
鮎落ちて水音軽くなりにつり
くれなゐも白も妖しや曼珠沙華
久闊を叙する通夜席秋の暮
落鮎や川の名変はる県境
秋味と答へ少年鮭を釣る
渋皮むく妻の根気や栗ごはん
師の色紙の冬句を額に冬用意
人は皆やさしくなれる花野かな
立冬や医の待合の顔なじみ

椋鳥の群

菅野日出子

我が町の起伏の多し葛の花
リハビリのゆるり体操秋桜
鴨の来て池畔賑はすカメラマン
亡夫ねむる向かひの丘や銀杏散る
草紅葉たれも気付かぬ辻仏
山鳩の連れだち歩む草紅葉
椋鳥の群るる大樹のけたたまし
色変へぬ松の傍への法の池
山茶花の散り敷く紅や風の色
落日の空へとけ入る冬桜

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



野分 加藤静江

八ツ橋の白じろ乾く野分晴
小流れの音のかそけし暮の秋
停泊の巨船に余る秋日かな
海迫る終点の駅虫しぐれ
大仏の頬に細き冬に入る
笹鳴きや彫刻深き覆堂
小春日や寺門の朽木枝を張る

路線バス 小田嶋野笛

夫の部屋 斉藤マキ子

落日へ尾を光らすや穴惑ひ
碧落やからくれなゐの朝の風
遅咲きの銀木犀や桂郎忌
浅草や江戸の匂ひの菊供養
明け暮れの今朝や驚く野の錦
栗棚や日に一本の路線バス
冬立つやこの新しき心持

己が影友としそぞろ月の道
目覚めゐて貨車の音きく寒露かな
あきつ舞ふ空の青さや七七忌
夫のあるやうに煮炊きや暮の秋
稜線に触るる入日や神迎
夫の部屋夫のぬくみのなき寒さ
加へたる齡重たしちゃんちゃんこ

冬 立 高木邦雄

風樹なる楓紅葉やほむらなす
洒脱なる小三治逝くや星月夜
町騒や何か急かるる今朝の冬
立冬や海石を洗ふ波幾重
寂聴の遺影ほほ糸む小春かな
目路遠き枯野貫ぬく大河かな
冬日和鎌倉五山巡りけり
踏石に小さき草履や七五三

神の留守 長尾タイ

鯛雲画布に溢るる筆の彩
稲架描く絵筆に夕日かたむけて
藁塚や青き匂ひのなつかしき
拝みて渡る神橋神の留守
銅鐸の音や銀杏黄葉の散り急ぐ
白波の秀先禰に鴨の陣
多羅葉や秋思の文字の浮き上がり

紅葉かつ散る 今村千年

風湧きて紅葉かつ散る山路かな
躓きて山路に拾ふ木の実かな
紅葉茶屋句帳どこかに忘れたり
村里の闇は美し虫時雨
北山は降りみ降らずみ時雨くる
隣より名の木落葉の便りかな
綿虫やつぶやくやうに波郷の句

十三夜 大川暉美

小流れの一縷や迫る紅葉山
鋏先の土の名残や秋起し
細りゆく虫の声聞き針仕事
秋深む栞に残る先師の句
堂塔へそそぐ光芒十三夜
冬めくや風の硬さの浜の道
山巒の深き翳りや夕時雨

文化の日 太田良一

秋風の通ふ難所や切通し
逝く秋や獣の見えぬ獣道
持ちよりの古本市や文化の日
文化の日長寿すすむる本を買ひ
釣り場所を探す岩場や小春風
雨音を払ふ手締めや一の酉
小春日の影濃き自刃やぐらかな

小 六月 岡田史女

何をする事なく過ぎぬ文化の日
石高を記す父祖の書冬に入る
冬うらら凭れし石のぬくもりに
延べ段を杖とたどるや木の葉散る
木洩れ日のうつろふ歌碑や小六月
火袋に仏御座する小春かな
露座仏を仰ぐ背や冬の鵲



青炎集

森清

堯選



横浜 池乗恵美子

人影の灯影へ急ぐ秋の暮
風立ちてよりの華やぎ初見草
街の灯の小さき瞬き秋の声
憂きことは全て過去形小鳥来る
新走り盃は形見の柿右衛門
林相の相調うて紅葉して

大網白里 亀卦川菊枝

秋の夜の仕掛け見え見え子の手品
木枯や胸に歳月降り積り
遠嶺より日の傾きて返り花
レストランまで鈴懸の落葉道
鏡面のごとき蒼天冬の鵞
地に伸ぶる影に齡の寒さかな

横浜 梅田 武

鰯雲青海原へ帰るかに
やはらかき風にやはらぐ尾花かな
すすり合ひうなづき合ひて走り蕎麦
朝日影新米の湯気しろがねに
良薬の温め酒注ぐ五勺かな
逢引きを静かに脅す添水かな

狭山 沼崎千枝

農園やおまけは赤き傷林檎
山城へ中仙道や帰り花
山積みの大根二本百円よ
おしやべりの真中にどんと煮大根
惑星の軌道に紛れ冬の月
時雨るるや受けの生食麵麴一つ

横浜 山崎稔子

抜け道の出口明るし赤のまま
遡る水脈の二筋鴨来る
近道の飛び石伝ひ水引草
藤色の秋薔薇の名ぞしのぶれど
糸のこ草戯して風の通り道
名残りの月並びて帰る句座のあと

横浜 上月智子

色艶の葉付きの届き里の柚子
小さくも見頃となりぬ庭もみぢ
弁天堂へ続く敷石銀杏の実
秋明菊夜風に白を深めけり
葉に触れて風に触れては色葉散る
日溜りへ移る会話や冬隣

川崎 滋野 暁

白石に四翅を展ぐや秋茜
退きてよりの日光初紅葉
死ぬるとは生きることや虫時雨
半分は汁や残りは零余子飯
御用邸守る黒松や秋の海
秋澄めりことさらへりの音高く

横浜 神谷さうび

溪紅葉流れは岩を研ぐばかり
濡れ縁に待ち構へたり名残の蚊
花石路の黄色もつとも日を集め
結界は竹一文字笹鳴けり
鴨の陣乱す亭午の汽笛かな
向き向きを違へ鉄鎖の冬鷗

横浜 池谷鹿次

思ひ出の朴歯ならして天高し
のうのうと杣道よぎり穴惑
明鳥の妙に騒ぐや今朝の冬
家康のお手植糸蜜柑色づきぬ
鮪船赤さび浮かべ帰港せり
青空にともしびのやう木守柿

横浜 伊藤由良

隣より木鋏の音秋うらら
ありなしの風に雨気あり秋桜
優さをまとひふはりと秋の蝶
残る蚊を打ちてもの憂き日暮れかな
赤き実を鴨より守る思案かな
今見よとメールの知らす十三夜

耕 土 集

岡野 里子 選



秋晴や千葉が手近に見ゆるほど
栗石めく団栗の道栗鼠在らず
いささかの安値新種のマスカット
干柿や渋柿めける奴逝きて
補聴器の落葉に紛れ見当らず

横浜 小長谷 紘

園児らを遊ばせ低く秋の蝶
母と居て大きな活字読む夜長
泳ぐかに萩の小道をかき分けて
離れ住む兄との別れ星月夜
稲架のみの残る田圃の夕日かな

横浜 小池 桃代

田を占むる泡立草や老ゆる島
鬼胡桃焚付にとや過疎の村
航跡の遠ざかる佐渡薄紅葉
薄紅の光一筋島の朱鷺
白鳥の早や戻り来ぬ越の湖

横浜 内山 みち

新築の庭の片隅水引草
秋風や半紙に滲む筆の文字
夕時雨錦帯橋を渡る音
山茶花や藁屋の垣に猫かくれ
引越や想ひ出燃やす夕焚火

横浜 廣部 尚美

秋高しジビエ料理と生一本
十六夜や神田生れの京舞子
通院は日課となりぬ花芒
尻高く踏み込むペダル鯛雲
秋深し畑に三筋の白煙

横浜 松川 昌義

纏ひたる母の残り香秋裕
名刹の人の流れや初時雨
奥庭のほのと明りや石路の花
母親が凝らす装ひ七五三
行き摩りの手締めに参加西の市

横浜 森川 享

銀杏散る母の金髪子に絡み
山茶花の垣を守るや子無く老い
庭蜜柑の日毎ふくらむ甘さかな
茶の花や祖母の歴史の丸き背
朔風や首すくめ行く画学生

横浜 岩崎 藍

憂き事の晴れ甘口の新走
二年振りの師の書に目覚め文化の日
東北へ叶ふ墓参や波たひら
木の葉髪記憶力をも落しけり
山茶花の千重に白落つ郷の寺

横浜 佐藤 勝代

啄木鳥や合間に木々を睥睨し
日溜りや路地に長居の秋茜
との曇り窓の傍ら吊し柿
神無月徒夢賭くる穴馬券
冬柳マスク美人に弾かれて

横浜 伊藤 鴉

足裏の湘南の砂小春風
小六月暮れなんととして人恋し
猫を呼ぶ声の明るさ日向ぼこ
目覚むるや障子の影の柔かき
公園の葉牡丹小さき主役かな

横浜 梅津まり子

猫の待つ家路急かされ初時雨
酉の市空に星あり灯あり
小春日や境内へ立つ陶器市
大屋根の庇まで干す布団かな
辻地蔵へ猫の屯す冬日向

文京 大曲ゆき枝

莢揺らし聴く豆の音後の月
二度三度休む坂道木の実落つ
軒深く風を引きよせ吊し柿
風紋の影のゆるるや枯尾花
コスモスや隠れん坊の子等の路地

横浜 秋山 文子

真青なる海よりの風萩そよぐ
赤とんぼ青空に群れ人に群れ
棉吹くや高原の空遙かまで
オリーブ油を腕に念入り今朝の冬
冬来るひさびさの子へ熱き鍋

横浜 古宇田伸子

実石榴のはじけて赤き身を晒す
糸尻や夜長の指を遊ばせて
大仏の耳朶豊か文化の日
硯海へ浸す穂先や冬灯下
裏庭のぽつりと石路の花あかり

横浜 市川 夏子